

佐賀福岡大分の三縣下へ行軍の道ゆき

園 哲 雄

- (一)
- (二)
- (三)
- (四)
- (五)
- (六)

山鳥の尾のまたり尾の
 いづこも秋はきさらぎの
 たちてゆくへはまら川の
 高橋 渡り 百貫や
 波の嶋原 温泉や
 こゝは津の國ならねども
 喇叭の聲に足並を
 松の上には鶴翔り
 浴みつゝ人の齡をば
 越ゆる坂路ハ何のその
 虹の松原はるくど
 誰がかなづらん琴の音ハ
 石と化りつること問はん
 神の社は田嶋なり
 うちこらしゝをゝしさを

長月ばろり白菊の
 花よりも猶紅の
 熊本をこそ出で初むれ
 この浦舟に帆をあげて
 遠くなるほどゆき過ぎて
 潮干のほどを思はるゝ
 揃へて心武雄なる
 巖に龜や遊びけん
 萬づ代にしも延べつべし
 日本のはての唐津には
 大空飛びて舞鶴の
 濱吹く風のとよぐめる
 われを呼子の濱千鳥
 尾張の國にあらねども
 残れる石に留めけり

なべて野もせに咲き亂れ
 もみぢをぬきとたつ田山
 月もろどもに出潮の
 はや住の江につきにけり
 蓬萊山に千とせ經る
 その麓なる温泉にハ
 領市振山の名も高く
 城は姿にあらはれて
 啼きてぞ誘ふ加部嶋の
 城の名古屋ハもろこしを

(六)

船をつり得て韓國を
國の界の怡土の濱

うちし御威稜は玉島の
すぐる深江の子負の原

川波今に流れつゝ
二つの石は足姫

(七)

みこどの祝ひたまひてや
前原すぎて芥屋に

舟こぎ入るゝ大門に
晝暗くしてゆき難し

墨の潮のある奥は
新羅より吹く風浪に

(八)

白砂まきてその奥は
ゆき得るをりの稀なれば

歌枕にも漏れぬらん
さしゝも生の松原は

武内の身に代りつゝ
愛宕の宮は花紅葉

(九)

松が枝をりて倒に
うせし真根子の社あり

もど探題の城なりき
城の跡とし傳ふれば

音にきく池の武時の
事に斃れし趾なれば

(十)

類あらしの山に似て
鳥飼村も探題の

今霄ばかりの命ども
草葉の露も悲めり

得たりやおゝと馳せ向ひ
射とりて赤き心をば

(十一)

雲々の鴈も音に啼きて
蒙古の賊の來し時に

太重二十重なる夷らが
見せし紅葉の松原は

絶景筆紙に盡し得ず
詣でゝ誰か水鏡

天満宮は菅公の

瘦せし容ぞ見給ひし

社は鳥飼八幡と

福岡に入り登るべき

荒戸の山の公園は

警固、小鳥、光雲、へ

(三) 羽の形の博多こそ もろこし船のよせたりし 袖の漑の名残なれ

澳の濱なる石垣ハ 寇し来りし異船を 拳下りに射出して
射伏せしものを福岡へ 石は移して跡もなし

(三) つなげる舟の綱を輪に 束ね敷きてぞ菅公を 休へまつりし綱輪をば

誰が綱場どいなまりけん 上矢の鏑一筋と いひてすぎにし櫛田には
もろこし人の乗りし船 つなぎ石てふ柱あり

行軍の道すがらよめる歌 下山氷川

四日 百貫石より瀛船にのらんとするに汐干にて渡船通はず皆ひと衣かゝけて
からわたりゆく

遠干かた衣かゝけてからわたる今のくるしみ後のたのしみ

全日 こよい有明の海上に碇泊しぬあけかた空晴れて月清し
めつらゑやふねこさいてゝなかむれば沖にも月の有明の空

六日 途中中川校長より北白河宮殿下御薨御の報に接し内田教授の哀悼の演説をきよめて
心に感しけるまよめる
きたくは身をは裂くともいとふへき國のみために神さりましたぬ